佳作

「生還」

秋山　孝幸さん

職場の定期健康診断を受けて二週間ほど経った頃、健診担当者より突然電話が入った。なぜ電話で？と少々訝しく思いながら聞いた話は、概ね次のような内容だった。

「健康診断の胸部レントゲン写真を精査した医師から、右肺に白い影があり、悪性腫瘍のおそれがあるとの診断が下された。健診結果の書面通知が届くのは、一ヶ月近く先になってしまう。手遅れになってはいけないから取り急ぎ電話で連絡した。すぐに精密検査を受けるように」

一刻も早く、との配慮から電話をしてくれたことはありがたかったが、それ以上にショックが大きかった。

その時、私は六十一歳。実は、私の父も兄も肺癌のため、六十一歳で他界している。電話を切った瞬間、私の頭の中には、「肺癌」「死」「通夜」「火葬場」「葬式」といった文字がぐるぐる巡り、亡き父や兄の最期の姿が蘇っていた。

しかしぐずぐずしてはいられない。連絡が入ったのは土曜日の午前十時頃。すぐに診察を受けなければ…。午前中なら診てもらえるだろう。まだ、癌だと決まったわけではない。良性の腫瘍かもしれないじゃないか。とりあえず、段階を踏んで、やるべきことを一つ一つやっていこう。そう自分に言いきかせ、必死で気持ちを落ち着かせようとした。

まず、診察をしてくれる医師を探さないといけない。電話帳を繰って、甲府市内の呼吸器内科医院に電話をした。

「保険証を持ってすぐに来てください」との返事に慌てて準備をする。

次にやるべきことは――そうだ、妻に連絡しなければ…。仕事中の妻に、しかも人一倍心配性の妻に、伝えるのは忍びなかったが、隠すわけにもいかない。

「落ち着いて聞いてくれ…」と切り出し、ことの概要を話す。案の定、妻は、「えっ！」と絶句。そしてしばしの沈黙。私は、「今から病院に行ってくる」と一方的に言って、電話を切った。

病院の待合室で待っている時間は、六十一年の人生を振り返るには短すぎた。心の整理もできず、踏ん切りもつかないまま、診察室に入り、問診を受ける。

「定期健診で右肺に影があると言われたんですね。最初にレントゲン写真を撮りましょう。まだ癌と決まったわけではありません」との先生の言葉に一縷の望みを託して、レントゲン室に入った。

しかし、撮影されたフィルムを見ると、右肺の下の方にくっきりと円形の影があるのが、素人目にも分かる。

先生は、その白い影を凝視し、大きさを計測した後、ゆっくり言葉を選ぶように、こうおっしゃった。

「直径二十六ミリの円形の影がはっきり出ています。今の段階で断定することはできませんが、八割方悪性だと思われます」

それを聞いて、目の前が真っ暗になるほど絶望したのを、今でも鮮明に覚えている。そして、父、兄に続いて、「まさか私まで！」と、運命を呪った。

それからすぐに総合病院を紹介され、種々の精密検査を受けた。その結果、初期段階の「扁平上皮癌」で転移等もなし、と判明。執刀してくださる医師からは、

「早期発見の賜物です。右肺下葉部を切除、摘出しさえすれば、その後の抗癌剤治療も放射線治療もおそらく必要ありません。根治の確率も高いですよ」と言ってもらえた。

聞くところによると、肺癌は、発見されたときには、すでに手遅れで手術できない場合も多いのだそうだ。そういう意味では、私は本当にラッキーだった。

そして、手術は成功した。

手術から三年余り経った今、再発も転移もなく、また特段の変調もなく、元気に過ごしている。健康診断による早期発見と、その後の関係者の方々の連携、適切な判断と治療が私の命を救ってくれたものと、心から感謝している。

この、辛くも貴重な体験から、健康のありがたさと早期発見の大切さを実感した私は、定期的な健康診断に加え、年に一度の人間ドックを、妻と一緒に欠かさず受けるようにしている。そして、一日一万歩のウォーキングを日課として、体力づくりに励む日々を送っている。